

最澄の六即義理解について

木 内 堯 大

一 はじめに

最澄の六即義に関する言及は、比叡山入山の際にしたためられた『願文』に始めて見られる。

我自_レ未_レ得_二六根相似位_一以還不_二出_レ仮_一。(其_一) (『伝全』一・二二)
若依_二此願力_一、至_二六根相似位_一。若得_二五神通_一時、必不_レ取_二自_レ度_一、不_レ証_二正位_一、不_レ著_二一切_一。(『伝全』一・二二)

先学が指摘するように、⁽¹⁾最澄が六根相似位に至るまで出仮しないとする⁽²⁾ことに關しては、『摩訶止観』に見られる下根は十信の相似位、中根は五品弟子位、上根はそれ以前とする三根出仮を根拠とすべきであり、自らを愚狂、底下の下根と置く最澄にとって、六根相似位を出仮の段階とするのは妥当である。

『叡山大師伝』の記述に基づいて、⁽³⁾時系列を追えば、『願文』撰述、内供奉補任、法蔵著作に引用される智顗説への邂逅⁽⁴⁾、鑑真将来文献の入手となるが、『天台小止観』に加えて『摩

訶止観』に関する知識も、『願文』撰述時点で最澄が既に持ち合わせていたことを認めざるを得ないと言えよう。

二 最澄撰『六即義集』の存在

ところで、最澄の撰述目録には、巻数の差異が見られるが『六即義集』という著作が見られる。

①修禅録「六即義集(一卷六十二紙)」(『伝全』五附・一五二)
②可透録「六即義集一卷」(『伝全』五附・一六四)

③龍堂録「六即義集一卷(三十二紙)」(『伝全』五附・一八二)
これらは現存していないが、最澄が六即義を重要視していたということはうかがえる。また、入唐の際の師の一人である行滿にも『六即義』の著作があり、最澄の請来目録にも記載が見えることも注目に値する。

三 『守護国界章』に見られる六即義

現存の最澄著作において、最澄が六即位に言及する箇所と

して、『守護国界章』の次の文があげられる。

夫諸大乘經中所説即是文、其義甚深。故依貧女宝蔵、安立六即位。諸大乘經中、姪欲即是道、瞋癡亦復然者、非是姪欲相、即是為菩提。唯觀姪欲性、即是為菩提。是菩提六即。彼未發心位、理即是菩提、得聞理即教。名字即菩提、對境觀貪性。觀行即是菩提、得六根清淨。相似即菩提、斷一品無明。証一分真如。初發心以上、等覺已還四十一地位、分真即菩提。究竟妙覺位、究竟即菩提。依涅槃經中貧女宝蔵喻、安立六即位。他家資糧位、寄配名字即。他家加行位、寄配觀行即。他家通達位、寄配相似即。他家修習位、寄配住行向十地及等覺。他家究竟位、寄配究竟即。是法門、雖造開皇年、符契顯慶詔。他家種性位、寄配理即位。他家意、五位從已發心立。山家立六即、加未發心位。五六雖增減、名義稍相似。但円融相即、法性法門、義全不相似耳。豈煩惱即菩提、專作諸惡業哉。法性相即義、広説自家書。恐煩更不道。〔伝全〕二二六四―二六五

前半部では、六即位は『涅槃經』の貧女宝蔵の喩を元にできたものであり、姪欲の相ではなく姪欲の性が菩提であり、その菩提には六即があるとして、六即の定義を並べている。これに関しては天台教学上、妥当な説となっている。

ところが、後半部では、六即位と唯識の五位とを一对一に対応させ、『成唯識論』による唯識の五位は已發心によつて立てられ、未發心位を加える天台とは五位と六位の差が生まれるとしている。

六即における未發心と已發心の境界はどの段階にあたるの

最澄の六即義理解について（木内）

であろうか。六即とはそもそも初心も是、後心も是ではあるが、増上慢を防ぐために、六種の差別を用いるのであり、湛然は、法華円教に約して發心を明かせば、已發心は名字即位にあるとする。

今專約円故通凡聖。理性尚乃得名菩提及以止觀、況復名字乃至究竟。今明發心在名字位、此名依理期心果頭。果頭之理初後無殊。約事差分六位階降。名六名即不即不離、思之可知。〔大正藏〕四六・一七八c―一七九a

円教に約し、凡聖不二の理からすれば初の理即も後の究竟即も仏果に殊なりはなく、事に約せば、六位の階降が存在するということである。名字即の發心というのは、不即不離であり、理に約せば初心も是であり後心も是であるということになる。従つて、最澄の言う所の未發心位というものも、事において理即を未發心とし、名字即已上を已發心としているに過ぎず、理では不即不離となるであろう。

ところで、前引の『守護章』に見られる六即と唯識の五位との対応に関しては問題がある。その説をまとめれば次のようになる。

理即 〓 未發心の位 〓 他家の種性位
名字即 〓 理即の教を聞くことを得る 〓 他家の資糧位
觀行即 〓 境に對して貪性を觀ずる 〓 他家の加行位
相似即 〓 六根清淨を得る 〓 他家の通達位

最澄の六即義理解について(木内)

分真即 〓 初発心以上等覚以下の四十一地位 〓 他家の修証位
究竟即 〓 妙覚の位を究竟する 〓 他家の究竟位

この対応関係が行位という観点からあり得るのかということ
とを検討するために『成唯識論述記』の文を見てみよう。

論、一資糧位至 〓 順解脱分。述曰、此在 〓 四十心、及已 〓 前位。從
初發心 〓 乃至十迴向終、皆名 〓 順解脱分、對 〓 法等一說。煖等已前
名 〓 解脱分。簡 〓 二乘 〓 故言 〓 大乘 〓 也。論、二加行位至 〓 順決択分。述
曰、即在 〓 煖等四善根中。此在 〓 初劫、下文等言 〓 勝解行地 〓 攝故。
論、二通達位、至 〓 所住見道。述曰、即在 〓 初地初入地心。論、四
修習位、至 〓 所住修道。述曰、即從 〓 初地住及出心、乃至金剛無間
心位、名為 〓 修道。論、五究竟位至 〓 正等菩提。〔大正藏〕四三・
五五六b)

この記述を元にして、唯識五位と六即の行位は、次のよう
に整理される。

唯識の五位

(種性位)

資糧位 〓 十住、十行、十回向

加行位 〓 十回向の第九・十

通達位 〓 初地

修習位 〓 初地 〓 十地

究竟位 〓 仏地

天台の六即

理即

名字即

觀行即 〓 五品位 (外凡位)

相似即 〓 十信 (内凡位)

分真即 〓 十住・十行・十回向・

十地 (分聖位)

究竟即 〓 妙覺 (極聖位)

唯識五位を別教の行位として考え、円接別で対応させても
円教行位の六即との対応関係はない。また、『法華秀句』に「夫

瑜伽論者、通 〓 三乘教。〔伝全〕三・一一七とあるのを根拠に、
唯識五位を通教位としても同様である。⁽⁵⁾

また、徳一は『瑜伽論』に見られる勝解行住について、次
のように十住、十行、十回向に対応させている。

是諸菩薩、勝解行住、下忍(十住) 〓 轉時、如 〓 上所說諸行 〓 上品。
中忍(十行) 〓 轉時、如 〓 上所說諸行 〓 中品。上忍(十回向) 〓 轉時、
如 〓 上所說諸行 〓 下品。爾則、十住菩薩、於 〓 六塵境、忘 〓 失正念。如
何得 〓 稱 〓 皆於阿耨菩提不退轉。〔伝全〕二・四三九

これに対して最澄は、勝解行住を法華の深信解の相、六根
清浄の位にあてている。

彈曰、汝所引瑜伽勝解行住、當 〓 法華深信解相、六根清浄位。汝
以義相 〓 攝 〓 十住 〓 十行 〓 十回向。山家以 〓 義推 〓 於 〓 六根清浄位、相 〓 攝
歷劫次第行。十住 〓 十行 〓 十回向。〔伝全〕二・二七六

深信解の相とは『摩訶止観』によれば、「当 〓 知已為 〓 深信

解相、即初品文也。〔大正藏〕四六・九八c)とあるように五

品弟子位の初品、六即で言えば觀行即にあたる。また六根清

浄位は相似即にあたる。これを当てはめてみても、唯識五位

と六即は『守護章』に示されたような対応関係にはない。た

だし、最澄はこの対応に関して、名義は似ているが円融の相

即、法性の法門の義としては不一致であるとする。

従って、資糧位と名字即位の対応は、已発心という共通性
のみによると言える。『成唯識論』には以下のようにある。

論曰、從^レ發^二深固大菩提心^一、乃至^レ未^下起^二順決択識^一、求^レ住^中識真勝義性^上、齊^レ此皆是資糧位攝。為^レ趣^二無上正等菩提^一、修^二習種種勝資糧^一故。為^二有情^一故勤^二求解脫^一。由^レ此亦名^二順解脫分^一。（『大正藏』三一・四八b）

ここでは資糧位は最初の発心と位置づけられている。最澄はその点から、名字即と同等にしたに過ぎないと思われるが、かなり紛らわしい対比とも言えるであろう。

ところで、理即と種性位を対応させている点に関して、最澄の指摘する種性位というものが、果たして何を指すのかは明確ではない。例えば『法華玄賛義決』には、「七地、一種性地、即種姓住未発心位。二勝解行地、即勝解行住発心已去在^二於地前^一。」（『大正藏』三四・八五六a）とある。勝解行住との関係から、これを種性位とすれば、種性位は未発心に位置づけられており、理即との対応関係にあるとは言える。

いずれにせよ、最澄の行った六即と唯識の五位との対応は初心から仏と円融相即するか、究竟位になって仏となるのかという重大な違いがあり、未発心と已発心ということの共通性以外には意味はなく、一対一の対応関係とすべきものではない。

また最澄は『法華文句記』の「已発之言、多指^二別教^一。別教知^レ中、雖^レ似^二已発^一、不^レ入^二証道^一。故須^レ令^レ入。」（『伝全』二・二七二）という文を採用しており、円教の発心と、別教の発

最澄の六即義理解について（木内）

心とは明らかに異なるものであることを主張しているのである。

四 『法華秀句』と六即義

次に、最澄の『守護国界章』と『法華秀句』の撰述態度の相違に関して、六即を通して考察したい。

最澄の宗派意識に関して、真野正順氏は後期宗觀念、浅田正博氏は後期宗派意識の用語を用いるが、特に浅田氏は『法華秀句』によって南都諸宗の上に立つ独尊性を擁した「天台法華宗」としての後期宗派意識が確立したとされる。筆者もこの説に賛成である。

はじめに結論を述べれば、『法華秀句』において「天台法華宗」に想定されるのは、凡夫から相似即を経て、分証即で聖位に入ることであり、ここに即身成仏も含まれる。

そして、『法華経』経力を重視する『法華秀句』では、六即の中でも相似即以上のみが言及されるのである。

また、最澄が『法華秀句』で目指したことの一つは、法相、三論、華嚴の所依とする經典を根拠に用いないという点にもある。それ故に、これは推測の域を出ないが、『法華秀句』では、六即を用いても別教の『瓔珞経』を根拠とする行位は用いていない可能性がある。

最澄の六即義理解について（木内）

謹案『法華法師功德品』云、爾時仏告常精進菩薩摩訶薩、若善男子、善女人、受持是法華經、若誦若誦、若解說、若書寫、是人當得八百眼功德、千二百耳功德、八百鼻功德、千二百舌功德、八百身功德、千二百意功德。以是功德、莊嚴六根、皆令清淨（已上經文）。當知、受持法師、誦法師、誦法師、解說法師、書寫法師、此五種法師、各依法華經、各獲六千功德、其六即位中、第四相似即位也。（略）當知、實經力用、肉眼令淨。他宗所依經、都無此眼用。天台法華宗、具有此眼用。（『伝全』三・二五八、二五九）

ここにあるように、『法華經』法師品における五種法師は六根清淨となることから相似即到に配当される。そして、天台法華宗では凡夫が『法華經』を修学することによって相似即位に入ると主張しているのである。すなわち次の『長講金光明經会式』に見られるように、最澄がこの日本や比叡山に養成しようとしたものは、六根相似位となる。⁽⁷⁾

大日本国及叡山 昼夜恒護正法藏 乃至同法善知識
俱修円行無妨難 早得六根清淨位 流入一乘大円海

（『伝全』四・二九二）

ところで、『華嚴經』の「初發心時、便成正覺」の語は、天台教学においては初住に成仏することの根拠とされる文であり、『守護国界章』の時点では、歴劫の位ではなく、直道の頓位を示す文証という地位を与えられていた。

彈曰、汝難非理、十住有別故。瓔珞本業經、六種性之位、約別円入別、說歷劫修行。三賢十地、地前地上、次第行布、真応二身、歸三德藏。華嚴經十住初發心住位、不相似本業。其華嚴經梵行品云、初發心時、即得阿耨多羅三藐三菩提、知一切法即心自性、成就慧身、不由他悟。已十住初住、便成正覺。何不能立聖位之名。汝執歷劫位、難直道頓位、豈不違教理哉。（『伝全』二・二七五）

しかし、後期宗派意識による『法華秀句』では、『華嚴經』も歴劫修行と判定されるのである。

華嚴海空者、即華嚴宗所依經也。俱說歷劫行、未知大直道。其大直道者是果分故。（『伝全』三・二四一）

従つて、初住位における最澄の即身成仏説は『法華經』の龍女成仏をめぐって展開され、『華嚴經』をその根拠とすることはないのである。

能化龍女、無歷劫行、所化衆生、無歷劫行。能化所化、俱無歷劫。妙法經力、即身成仏、上品利根、一生成仏、中品利根、二生成仏、下品利根、三生成仏。見普賢菩薩、入菩薩正位、得旋陀羅尼。是則分真証。（『伝全』三・二六五、二六六）

次に安慧撰の『愍諭弁惑章』には、即身成仏の根拠として『華嚴經』に依拠する部分が見られる。

第三。華嚴經發心功德品云、初發心時、便成正覺、知一切法真實之性、具足慧身、不由他悟（已上文）。意云、從相似十信、始入初住分真之位也。初發心者、謂三種心開發。一緣因善心發。

二了因慧心發。三正因理心發也。住者住三德涅槃也。由緣因善心發故、住不可思議解脫首楞嚴定、由了因慧心發故、住摩訶般若畢竟之空、由正因理心發故、住實相法身中道第一義諦也。經文既云「初發心時便成正覺。明知、即身成仏也。」(『伝全』三・三七四～三七五)

『愍諭弁惑章』は、徳一『天台宗未決』に対する反論であり、いわば最澄と徳一の三二権実論争を引き継いだものと言える。内容的にも、例えば最澄における無性成仏とは、法華開顯による一乗を基本にすえて、約位、約障による差別であり永久に仏性がないのではなく、位が上げれば、いずれ成仏することができるといふものであったが、『愍諭弁惑章』ではこの約位説が採用されており、最澄説の踏襲という要素が強いと言える⁽⁸⁾。

しかし、『愍諭弁惑章』では『法華秀句』に見られる即身成仏説を採用しながらも、『華嚴經』をその根拠とする点において、『法華秀句』における最澄の態度との相違が見られるのである。

以上のように、本稿では最澄の六即義理解について検討した。『願文』撰述当初より、相似即位にこだわりを見せた最澄が、比叡山に養成しようとしたのは六根相似位の人材であった。特に『守護国界章』から『法華秀句』への展開に見られる、相似即以上への言及と、『華嚴經』の位置づけは、『法

最澄の六即義理解について(木内)

華經』の経力を重視した最澄の態度の表れと言えるであろう。

- 1 関口真大「伝教大師願文の研究——とくに五願の第一條について——」(『天台小止観の研究』第七版・山喜房佛書林・一九七四)。
- 2 『大正蔵』四六・七九c。
- 3 『伝全』五附・五〇六。
- 4 小止観と『願文』の關係については、関口真大「伝教大師『願文』と天台小止観」(関口前掲書所収)を参詳のこと。
- 5 徳一と最澄の行位論の相違、初発心と初住位の問題、法相の位置づけに關しては大久保良峻「最澄と徳一の行位対論——最澄説を中心に——」(『加藤精一博士古稀記念論文集 真言密教と日本文化』上(ノンブル・二〇〇七)を参詳のこと。
- 6 真野正順「仏教における宗觀念の成立」(理想社・一九六四)、浅田正博「伝教大師最澄における宗派意識の推移について」(『日本仏教綜合研究』一・二〇〇二)。
- 7 本間孝繼「伝教大師の行位解釈について——相似即位と円機已熟の關係を中心に——」(『天台学报』四八・二〇〇六)では『法華秀句』の検討を通して、「円機已熟とは、實質的にみて凡夫が円融三諦を解了、即身に六根清浄位に得入して聖位を窺える状態と解せるように思われる」と述べている。円機已熟の語が見られる『依憑天台集』序文は、後期宗派意識の確立した『法華秀句』撰述以前の著作であり、円機已熟の行位に關してはまだ検討の必要もあるかと思われるが、最澄が天台法華宗で養成しようとした人材は六根清浄位と言えるであろう。
- 8 拙稿「初期日本天台における無性有情成仏の論理」(『天台学报』五二・二〇〇九)参詳。

〈キーワード〉『願文』、『守護国界章』、『法華秀句』、『愍諭弁惑章』

(大正大学非常勤講師・博士(仏教学))